

日本地理学会台風 19 号緊急報告会

12 月 22 日（日） 09:00～12:00（早稲田大学 3 号館 301 教室）

キャンパスマップ

<https://waseda.app.box.com/s/pbxii35yfxie8jb35ad9vg55dq0qlcww>

プログラムおよび発表要旨（発表は各 15 分）

・災害対応本部長（松原 宏理事長）あいさつ

・2019 年台風 19 号による宮城県丸森町の斜面崩壊の状況について：佐藤 浩（日本大）・宇根 寛（日本地図センター）

概要：19 号台風で雨量が 500mm を超えた地域で斜面が崩壊し、沢沿いには土石流が発生して多量の土砂が下流にもたらされた。同様の事例は昨年 of 西日本豪雨などでも見られ、本地域の被害との比較については今後の課題である。

・福島県中通り地域（阿武隈川流域）における台風 19 号がもたらした産業被害：初澤敏生（福島大）

概要：台風 19 号にともなう産業被害は、地域によって被災の特徴が異なっている。本宮市では中心商店街が被災し、特に周辺地域の被害が大きい。これに対し、郡山市では中核工業団地が被災し、損害額が大きくなっている。これらの地域は 1986 年にも水害に見舞われており、それとの比較も必要である。

・台風 19 号による茨城県内における那珂川水系・久慈川水系の被害について：小荒井 衛（茨城大）

概要：茨城大学の調査団としての取り組みを中心に紹介する。破堤箇所や浸水箇所は、概ね防災地質学の授業で教えている、災害リスクの高い箇所で発生していた。また、水害防備林等がある程度の効果を上げていることが確認できた。破堤箇所では河床礫や堤体構成物を中心とした土砂が流出しており、後背地の被害を大きくしていた。

・台風 19 号久慈川中流域洪水災害における伝統的治水工法と住民意識：長尾朋子（東京女学館）

概要：久慈川中流域にある霞堤や水害防備林は、地域住民の理解と維持管理が不可欠な地域社会と河川が共生する視点に立脚した伝統的氾濫許容型治水システムである。災害状況、地形変容プロセスおよび地域防災意識に与えた影響について報告する。

（休憩 10 分） ポスター展示：国土地理院

・2019 年台風 19 号による渡良瀬川流域永野川、思川の外水氾濫の特徴と教訓：須貝俊彦（東京大）・クンガメルゲン・宮本樹・寺田龍矢（東京大・院）

概要：同一河川の急勾配な礫床区間の複数個所で、破堤氾濫が発生し、鉄道、学校・保育園等が被災した。瀬淵構造・河道屈曲（水衝部の分布）、合流支流、旧河道、橋梁が、破堤に影響した可能性が高い。詳細な「地形分類図」ができていれば、破堤氾濫域をある程度予測できた可能性がある。

・2019 年台風 19 号による越辺川・都幾川（荒川水系）の水害状況：青山雅史（群馬大）・田中 圭（日本地図センター）

概要：越辺川では外水氾濫（合流付近での越水決壊）と内水氾濫（本川からの逆流防止のために水門閉鎖）が各地で発生した。都幾川の浸水被害に関する調査では、浸水域、破堤（越水、溢水）地点の地形条件、土地利用履歴や過去の浸水履歴などの検討を行った。内水氾濫が発生した地域の浸水域・浸水深の推定マップを作成した。また、被災地域の抱える課題（本川への排水や上流域の開発など）の検討を行った。

・2019 年台風 19 号による千曲川流域の洪水被害：廣内大助（信州大）・小野映介（駒澤大）・山縣耕太郎（上越教育大）・中村祐希（信州大・学）

概要：千曲川流域では、上流の佐久穂、佐久地域から上田、長野盆地をへて飯山まで氾濫被害が確認される広域の災害であった。一方上田より上流と下流の長野や松代では、地形が異なり、特に下流側は氾濫原での水害の特徴を呈し、被害の様子も異なっている。今回これらを調査し、洪水被害と地形の関係に基づいて被害の特徴や様相を検討した。

・令和元年台風 19 号に伴う大雨による浸水推定段彩図について：研川英征（国土地理院）

概要：令和元年台風 19 号に伴う浸水範囲を迅速に把握するため、斜め写真等と標高データを使用して、浸水範囲における水深を算出して深さごとに色別に表現した浸水推定段彩図を作成した。

・コメント・討論

①地形をどう見るか：海津正倫（名古屋大）・久保純子（早稲田大）

②防災行政と地理学：宇根 寛

③災害と土地政策：鈴木康弘（名古屋大）